

## 2013年4月7日 マタイ6:9-13「御名をあがめさせたまえ」

「主の祈り」を一節ずつ丁寧に読み解いております。「このように祈りなさい」とイエス様が与えてくださった祈りの手本です。繰り返し申しておりますが、私たちの祈りは罪人の祈りですから、ともすれば自分中心の身勝手な願いを祈って、神様の耳をわずらわせてしまうものです。さらに悪いことには、そうやって祈れば祈るほどに自分への執着が増して行って、かえって神から思いが離れていくということさえ起こりかねない。ですから私たちの祈りを整えて訓練するための手本として、イエス様が「主の祈り」を与えてくださったのです。

今日は最初の祈りである「御名をあがめさせたまえ」という祈りに教えられたいと願います。御名という言葉はキリスト教に独特の言葉で、ワープロでは変換してくれません。御名前ということですね。だれの御名前か、原文では「あなたの御名前」。あなた、すなわち神様あなたの御名前があがめられますようにということです。

ただし、あがめられますようにというのは、偏った意識です。原語では、聖別される、聖とされるという言葉が使われていますので、お名前が聖なるものとしてふさわしく扱われますようにというのが本来のニュアンス。少し、聖書的な意味において「聖なるもの」とはどういうことかということ整理しておきましょう。ヘブライ語では「聖」という言葉の語源は「分離」であるという説が有力です。もともとどういう場面で「聖なるもの」ということが問題になったかということ、エルサレム神殿でいけにえをささげる儀式です。神様にささげるいけにえに、傷や汚れがあってはならない。だから、祭司が綿密にチェックしまして、汚れ・傷の無い羊を群れの中から特別に「取り出す」、すなわち「分離」する。こうして分離されたものが聖なるもの、それ以外が聖ではないもの。こういうところから始まって、例えば人間の中でも、特別な祭司や王、預言者として選ばれた者たちは、分離された聖なる者たちとして扱われ、そのしるしとして香のよいオリーブの油を注がれるという習慣が生まれてくる。そうして油注がれた者たちは、聖別された特別なカリスマの持ち主として、それにふさわしく扱われ、尊重されるわけです。

ですからここで「神様の御名前が、聖とされますように」と祈る時に願われていることは、そのような特別なお名前として、この世界にあってふさわしく取り分けられ、尊重されますようにということです。そして、お名前が尊重されるというのは、要するに神様が尊重されるということです。より正確に言うならば、神様が本来のお姿にふさわしく尊重されるということです。神は人間とは異なる方であり、私たちを超越した方です。聖書の教えによれば、人間のほうから神に近づくことは決してできません。なぜなら神は、この地上世界から完全に区別された「聖なる方」でありますから、私たちの知性や感覚やあるいは宗教性を駆使しても、決して手が届かないのです。私たちが持っている能力の限界の、その向こうにおられるからです。神が聖なる方であるとはそういうことです。私たちがどうあがいたって神に近づくことはでき

ません。神の方から近づいてきてくださって、出会ってくださるのを、ありがたく受け取らせていただくしかないのです。神とは、そういう聖なる方、大いなる恐るべき方、ありがたい方です。そういう神が、まさしくそのような方としてふさわしく扱われ、尊重されますように・・・それが御名をあがめさせたまえという祈りです。

では、考えてみましょう。どうしてこのような祈りが必要になるのでしょうか。それは、神の聖なる御名前がふさわしく扱われていないという、私たちの世界の現実があるからです。御名前があがめられる、ほめたたえられる・・・その反対という、どういうことになるでしょう。それは、名を汚すということになります。私たちは、神の名を汚してばかりいるものです。

旧約聖書の詩編の中には、「神などいない（詩編 14：1）」とか、「神は見てはいない（詩編 94：7）」といった人間の声記録されています。こういう声は今も私たちの周りに渦巻いています。神を神としてふさわしく尊重せずに、神の名をおとしめる声です。先日、訓練会の際に牧師仲間から聞いたのですが、少し前までやっていた「純と愛」という連続テレビ小説のエンディングがすごかったという。どうすごかったかという、そのセリフがすごかった。なんでも、最愛の恋人が死んだかなにかで、そういう悲しみの中で主人公の女の子が「神様などいない」と言うそうですね。「もう神がいたとしても、私は頼らない。奇跡は人間が起こすものだから。」と、こういうセリフで締めくくられたそうです。私たちにとっては残念なことです、仕方ありません。祈りが聞かれない悲しい現実の中では、そのように考える人がいて当然です。まことの神の代わりに「自分」を神の位置において、自分で自分を励まし助けようとする、それしか魂を守る術を知らないのです。

ただキリスト教信仰の立場からして問題なのは、このようなセリフには、人間の罪への洞察が決定的に欠けているということです。神に頼らずに生きていけるといふなら、生きていかれたらいいんです。でも、そうして頼りにする自分という存在は、弱く貧しく、それだけでなく決定的に病んでいて間違っていると教えるのが聖書の教えです。確かに人間は驚くほどのポテンシャルをもっている。でもそういう奇跡的な力を用いて、他者を傷つけ、世界を破滅に向かわせるのも人間です。神に頼るとか頼らないとか、そんなことがこのセリフの問題ではないのです。それよりもむしろ問題なのは、この主人公が自分は神様に頼ることができる、と図々しく前提にしていることの方です。神がいたとしても、私は頼らない・・・そんな偉そうなことを言える身分ではないのです。もし神がいたとしても、あなたのことなど助けてはくれない・・・私たちは誰も、そのように言われてしかるべき罪人なのです。そういう自覚を決定的に欠いたままで、神などいない、神など必要ないと多くの人がうそぶいて、神に反逆しています。

でもこれは、他人事ではありません。まことの神を信じ従うと信仰告白したはずの私たちもまた、時に神よりも自分のことを上に置いて、神の名を汚し続けているという反省を忘れてはならないと思います。先週の訓練会で礼拝ということテーマに聖書から学んでいたのですが、講師の先生が教えて下さったのが「礼拝=Worship」とは「価値=Worth」を語源にしている

ということでした。そう考えると、礼拝とは「神の価値を認めること」。聖なる方、ありがたい方として、神の無限の価値を認め、すべてに優先して神を大切に、神の与えてくださる教えに忠実に聞き従っていく・・・。それはこの日曜日の2時間弱の時だけの話ではなくて、人生のすべてにおける問題です。私たちは人生すべてにおいて、そのような礼拝をしっかりとやっているのか、神の価値を認めているのか・・・。胸を張れる人はいないかもしれません。そんな私たちの姿が、悪い証しとなって、神はいないという声をますます助長しているということを、忘れてはならないのだと思います。

もう一度改めて、テキストを詳しく見てみましょう。今日与えられているのは、「御名があがめられますように」という祈りです。細かな文法のことを申しますと、原語ではここは受身形ですので、この新共同訳にあるように「御名があがめられる」「お名前が聖別される」という訳でいいのです。御名をあがめさせてください、ではないのですね。あがめられますように、とあくまで受身形です。こういう受身形は「神の受身形」といって聖書の言葉遣いに特徴的なものでして、この文章の隠れた主語は神様なのです。クリスチャンというのはこういう言葉遣いをするものですね。私が死ぬではなく、天に召されると言います。これは、神が私を天に召される、と神が主語です。自分で成功を勝ち取ったではなくて、成功が与えられると言う。だれが与えてくださった？神です。つまり神が成功を与えてくださったと言いたくて、成功が与えられたと受身形で話す。信仰を持つということは、こんな具合に、生き方全般において主語が変わることでもあると考えると面白いですね。それが聖書に教えられた者の言葉遣いです。

この場合でも同じです。要するにどういうことかといいますと、回りくどく「あがめられますように」と言っておりますが、単刀直入に言えば、神様がそのようにしてくださいとお願いしているのです。あなたの御名前がふさわしく聖とされるように、あなたがご自身でなんとかしてください、こういう祈りです。

神様がなんとかしてくださいを凶々しく求めているのです。このことは覚えるべきです。礼拝で祈られるような「御名をあがめさせたまえ」だとどうもその点がぼやけてしまいます。私にあなたの御名前をあがめさせてくださいじゃないのです。神様なんとかしてくださいという祈りです。何とかしてもらわなければ、なんともならないからです。私たちはみんな、先に申し上げたような、神の名を汚し続ける罪人であって、自力では決して、御名をあがめることなどできないからです。だから祈るのです。

「神様、どうかあなたご自身の手によって、この私の中であなたがふさわしく尊重されますように。世界中であなたがふさわしくほめたたえられますように。あなたがなんとかしてください。あなたの力をお示してください。」と祈るのです。

そして私たちが覚えるべきは、このような祈りが、主の祈りの一番最初に教えられていることの意味です。イエス様が、第一に祈るべきこととして私たちにこの祈りを教えて下さいまし

た。この祈りが、絶対に必要だから、実現されるべきだから、まず真っ先に、この祈りを教えてくださいました。この祈りが実現して、まことの神を神としてふさわしく尊重することができるようになることが、私たちにとって、またこの世界の一人一人にとって絶対に必要なのです。これは実現するべきことなのです。だから祈って求めなさいとイエスは教えてくださいました。

なぜなら、これが実現しないなら、私たちは永遠に、よりどころを見失ったままだからです。アウグスティヌスの言葉、「あなたは人間を呼び起こして、あなたをほめたたえることをよこびとされる。あなたは私たちを、ご自身に向けてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。(アウグスティヌス『告白』より)」まさにこのように、人間というものはまことの神のかたちとして、神と共に生きる者として創られたと聖書は教えます。だからこそ、この神のひざもとに帰ってきて、神を正しく自分の神としてあがめ、ほめたたえることを始めなければ、私たちは自分がどこに立っているのか永遠に分からないままなのです。

本当に私たちは、自分がどこに立っているのかも、どこから来てどこに行くのかも知らないまま、小さな自分だけを頼りに手探りで歩んでいる迷子です。でも憐れみ深い神は、そのような私たちを探して、ご自身のもとに取り戻してくださる方です。私たちが神の名を汚しても、神を神として大切にすることがなくても、神はどこまでも私たちを大切にしてくださって、自らがまさしく神であることを、私たちに明らかにしてく下さる方です。

エゼキエル書 36:22 から「それゆえ、イスラエルの人に言いなさい。主なる神はこう言われる。イスラエルの人よ、わたしはお前たちのためではなく、お前たちが行った先の国々で犯した聖なる名のために行く。わたしは、お前たちが国々で汚したため、彼らの間で汚されたわが大いなる名を聖なるものとする。わたしが彼らの目の前で、お前たちを通して聖なるものとされるとき、諸国民は、わたしが主であることを知るようになる、と主は言われる。」

この言葉を詳しく解説する時間はありませんが、とにかくここで大事なことは、お前たちが汚してしまった私の名を、私自ら聖なるものとする、神が言っておられることです。そしてご自分が大いなる神であることを、お前たちにも、また世界中の国々にも明らかにすると、神が約束してくださっていることです。聖書の伝えるまことの神とはこのような方です。私たちが大いなる神の名をおとしめつづけ、あるいは拒み続けても、そんな人間のこざかしい反抗など笑い飛ばすかのようにして、ご自分でご自分の名を聖とされ、私はここにいると名乗り出てくださいるのです。そうして力づくで私たちがかたくなな心をこじあげ、自ら私の救いの神となってくださいるのです。

だから、あなたたちの方でも、この神に祈り求めなさいというのが、イエス様からの招きです。私の魂があなたをあがめ、あなたをほめたたえることを喜びとするように、どうかあなたが強く働きかけてください。わたしがあなたを、私の神としてふさわしく大切にすることができますように、どうかあなたの助けを与えてください……。このように祈りなさい。という

よりも、このような祈りをなすことができるなら、もうすでに私たちの魂は、まことの神のもとに取り戻されて、永遠の安らぎを得ているはずです。一人でも多くの方に、そんな平安が与えられますようにと祈っています。

お祈りします。

### ○ ハイデルベルク信仰問答による導き

問 122 第一の願いは何ですか。

答 「御名をあがめさせたまえ」です。

すなわち、

第一に、わたしたちが、あなたを正しく知り、  
あなたの全能、知恵、善、正義、  
慈愛、真理を照らし出す、そのすべての御業において、  
あなたを聖なるお方とし、あがめ、  
讃美できるようにさせてください、ということ。

第二に、わたしたちが自分の生活のすべて、  
すなわち、その思いと言葉と行いを正して、  
あなたの御名がわたしたちのゆえに汚されることなく、  
かえってあがめられ讃美されるようにしてください、  
ということです。